

名 称	多治見市市民活動交流支援センター “ぽると多治見”
所 在 地	〒507-0033 岐阜県多治見市本町2-1-4
連 絡 先	TEL : 0572-22-0320                      FAX : 同左  URL : <a href="http://www.e-tajimi.net/t-ksc/t-ksc_index.html">http://www.e-tajimi.net/t-ksc/t-ksc_index.html</a>

## 地域の現況・特色

活動対象地域の人口     多治見市   118,000人

本多治見市は、岐阜県の東南部に位置し、平成17年1月に笠原町が合併した。市のほぼ中央を土岐川が流れ、四方を自然豊かな山に囲まれた盆地であり、冬は寒く、夏の暑さは日本一である。2つの国宝を持つ虎渓山永保寺は桜やシデコブシ、もみじの名所であり、日本三大修道院の一つ「カトリック多治見修道院」では葡萄畑やワイン祭りが有名である。

近年は、経済不況の影響を受け地場産業の窯業は低迷し、中心市街地も空き店舗が目立つようになった。

国道19号線と248号線、中央高速道路、JR中央線が交わる交通の要所から、名古屋のベッドタウンとして、ここ30～20年は宅地の開発が進み、人口も増加してきたが、今後は緩やかな下降が予想されている。市内には古くからの住民と新住民が混在している場所や、新住民だけの団地などがあり、各地区の自治活動の意識にバラつきがある。また、少子化が進み、その対策と子育て支援が課題になっている。

## 事業の名称、活動概要

### 名称 第3回NPOボランティア交流フェア

社会貢献活動に取り組む市内のNPO、企業、学校、地域、行政が連携協力して行っているフェアは第3回目を迎え、中心市街地で日ごろの活動を発表するイベントとして開催した。このフェアの特色は「交流フェア」という文字が示すように、団体間の交流、市民と団体の交流、民間と行政の交流、多世代（上は80歳代から下は小中学生まで）の交流、地域間の交流などあらゆる面からの交流を目的としている。

子どもたちには地域の一員として自主的に参加することを促し、大人に交じってボランティアを体験することで、社会性を育て、郷土愛を持って成長できると考えた。特に、核家族化が進む中、世代間の交流を体験することは学ぶことが多い。また、逆に子どもたちの参加を受け入れる側の大人たちには、子どもと接することにより、地域での子育ての意

味を考える機会となった。

## 事業の実施に至る背景、連携・協働のねらい

NPOボランティア交流フェアは当支援センターの恒例のイベントとして、市内の市民活動の活性化を目的として平成16年から行われている。また、当センターは、中心市街地の商店街空き店舗を活用して設置しているため、中心市街地の活性化にも寄与したいと考えている。そのためには若い世代がまちづくりに係わる必要があると、特に中高生にとってもフェアに参加し、必然的に多世代交流を体験することが心の成長につながると思われる。

また、センター利用団体やフェア参加希望団体活動分野は多岐にわたっており、子どもに関する活動をしている団体も多い。学校も地域の一員として貢献活動に取り組んでいるところでは、大人が中心になって子どもに関する活動をするだけでなく、子ども自身が主体となって活動している団体があり、フェアには、「一家庭一ボランティアの会」「多治見中学校輝き隊」「多治見西高等学校スマイリーショップ」「岐阜県立多治見工業高等学校」の参加があった。各団体は、それぞれ、家族での駅前清掃や花壇の手入れ、地元の各種イベントの手伝い、商業化の勉強を兼ねて模擬店の経営、まちづくりを考える活動を行っている。今回はこのようなグループをクローズアップしたいと考えた。「岐阜県立多治見工業高等学校」の生徒が看板の作成に当たり、先生・生徒が取り付けに当たった。

## 事業の内容

### ① 事前準備として行った取組（企画段階）

支援センター利用団体にフェアの実行委員としての参加を呼び掛け、名乗りを上げた17名が第3回NPOボランティア交流フェア実行委員会を立ち上げた。この中から実行委員長、副委員長を選出し、実行委員会を5回開催した。実行委員のメンバーはNPOだけでなく、地元商店街の理事長や企業、中学、高等学校の教員も参加した。フェアの内容等は実行委員会で決定していった。正副実行委員長と事務局との話し合いを随時行い、問題点を共有できるように連絡調整を行った。平行して、センターのHP、ニューズレター等で参加希望を募り、40団体の参加申し込みを得た。特に、学校関係者には個別に訪問した。参加団体の説明会を2回行い、連絡体制を密にした。PRに関して、参加団体や学校・企業・商店街・地域住民へのチラシ、ポスターの掲示等の協力を呼び掛け、市の広報誌や記者発表やFMpipi・おりベネットワーク(ケーブルテレビ)などで広報活動をした。また、NHKのローカル放送でも取り上げられた。

「市長と語る会」で実行委員と参加団体が市長にフェアに対する取り組みを説明し、協力をお願いした。

## ② 活動の展開内容（活動段階）

第3回NPOボランティア交流フェアは、平成18年11月11日（土）・12日（日）の二日間開催された。会場は当センターをメイン会場として、中心市街地に6会場を設け、スタンプラリーで会場を結んだ。内容はパネル1枚（90cm×180cm）と長机（60cm×180cm）1台を1ブースとし、展示や無農薬野菜や手作り品など活動の成果物の販売などを行った。希望団体は、各ブース前で15分程度、聴衆を集めての活動発表を行った。活動発表は事前にプログラムを組み、実行委員が呼び掛け、聴衆を集めた。消防本部によるAED講習にも多数参加があり、屋外会場では和太鼓、琉球太鼓、アニメーションダンス、防災訓練（消火訓練・煙体験）などの実演が行われ、参加団体によるカレーライスや炊き込みご飯の販売が行われた。

この中で、多治見西高等学校「スマイリーショップ」は、市民との触れ合いと商店街の活性化についての研究成果を発表した。また、一家庭一ボランティアの会は家族で参加する奉仕活動が、親子の絆をつくり、社会参加の体験を通して自信が得られてきたことをパネルで紹介した。

その他にも、多治見中学校「輝き隊」は、地域の施設等でのボランティア活動の様子をパネル紹介やパワーポイントを使って発表したほか、二日間延べ約50人がイベント協力スタッフとして、フェアに参加した。メンバーは6会場の受付を担当した。受付ではフェアに関する資料（フェア冊子、スタンプラリー用紙、協賛店マップ、アンケート用紙）の配布や、スタンプの押印、三角くじによる抽選、賞品の引渡しや会場の案内に携わった。メンバーの活動は素晴らしく、他の参加団体や実行委員（大人）とのコミュニケーションも綿密だった。二日間のうち一日だけしか参加できないメンバーもいたが、仕事内容の引継もきちんとなされていた。

フェアは6会場をスタンプラリー方式で行い、来場者には楽しみながら、市民活動に触れてもらうことができた。中心市街地の商店街や参加団体から寄付された景品を三角くじで引いてもらう企画もあった。

子どもたちだけではなく、大人たちも子どもとの交流から子どもの持つ素晴らしい力や感性を認識し、新しい流行の知識なども得て楽しんでいた。

## ③ 連携・協働に当たってのポイント・留意点

フェア開催に当たり、数多くの学校関係者に参加を呼び掛けた。学校からは、休日のイベントに引率者が居ないとか、何か起こったときの保障はどうなるのかといった意見が出された。フェア実施に当たってはイベント保険に加入し、参加団体の多くは社会福祉協議会のボランティア保険に加入してもらった。また、車道を挟んで会場があるところでは地元の交通安全協会に交通整理に当たってもらった。

子どもが活動している団体といっても、現実には運営スタッフは大人であることが多く、活動に関しての決定権は当事者である子どもたちには与えられていない場合が多いことが分かった。今回参加した団体は、メンバーの意思を相互に尊重し、運営スタッフの意欲的な考え方や取り組みで、子どもが参加するための方策が積極的に検討された。

事務局や実行委員会も参加団体の意向を受け入れ、参加者の安全や子どもたちの休憩の取り方、昼食等の問題点を検討した。

連携、協働に当たってはお互いの意思がどこまで通じ合っているかがとても大切である。そして、問題点を解決する意思が、時としてはマイナス思考になり、参加できないことの言い訳にすり替えられることもある。事業の成功のためには団体運営スタッフの個々の意識が物事の決定に大きく影響することから、事務局はスタッフに、前向きな意思を持ってもらえるような働きかけの仕方が大切であると感じた。

## 事業の成果と今後の課題

学校としての取り組みや、生徒たちの活動を市民に紹介することにより、地域との結びつきや、他の団体との交流や連携が生まれた。

今回、学校の特色を生かしたフェアの看板を各会場ごとに設置し、会場ではスタッフとして協力してもらったことにより、他の団体や担当者との連携を図ることができた。（中・高校生、大学生）

また、フェアの看板デザインは、大学生が中心に、アートの発表の場を提供する活動している「アートシーンマガジンON！作成委員会」が担当し、フェアに参加された団体の“ロゴマーク”を大学生が協力して作成し、現在も使用されている。参加団体間との連携も出来て、大学生もイラストでまちづくりの社会貢献ができ、社会勉強ができたと喜んでもらった。

もっとも大きな成果は、フェア参加団体同士の「交流」が生まれ、団体の新たな企画を協力し、協働での事業が生まれたことである。「多治見を美しくする市民の会」「一家庭一ボランティアの会」「かがやき世代の会・多治見」の3団体が「日本一きれいなまちづくり」と題して中学生・高校生・一般市民に参加を呼び掛け、「美しいふるさと」を目指して、JR多治見駅前を中心に、多治見市を10年かけて美しくし、まちの再生を図ろうという活動が誕生した。市民団体、一般市民、中・高生、岐阜県、多治見市、JR多治見駅が協働した活動である。行政としては、岐阜県（木の剪定）や多治見市環境課（放置自転車の撤去）に分かれて行われることが、市民の活動として同時に行えたことである。

当センターは事務局として組織間のコーディネートに努め、今後もこの活動を見守りたい。



参加団体の活動発表の様子（中学生）



参加団体の活動発表の様子



「琉球國祭り太鼓東海地区」の演技



「多治見市生活学校」による昼食の提供

執筆者職・氏名：多治見市市民活動交流支援センター 相談員 武知 明美  
多月 緑

#### コーディネーターからの一言コメント

NPO等が中心になり開催したイベント「交流フェア」に参加した市民や中高校生の各グループや団体、行政等の各機関等がその後も「美しいまちづくり」のため連携、協働しながら実践している取り組みは、市民の情操を高め、青少年に好影響を与えている。地域ぐるみで行われているイベントの在り方として参考になる。

(坂東 侑司)